
第12回公開研究会

テーマ 元校長が語る、内申書を参考にせずに入試を行う公立高校のリアル

発表者 磯村 元信 筑波大学卒業・都立秋留台高校校長・都立八王子拓真高校校長・ぼうず教育実践研究所代表

司会 井村 良英 関西大学卒業・認定NPO法人育て上げネットで若者支援活動

発表概要

「こどもの学び困難支援センター」は文部科学省からの受託研究機関として、学校外での子どもの学びをどう評価し、在籍している学校に返したらいいのか研究しています。また文部科学省が全国に約24校の不登校特例校を300校にまで増やすと言っていて、その時の参考になるようなものを集めてほしいとのことで研究を進めています。

しかし、今日は「こどもの学び困難支援センター」の研究会なので、端的に申し上げると、別に内申書を気にしなければそんな問題はクリアしてしまうのではないかと、文部科学省的には元も子もないような話になります。そこにはいろいろな課題や問題があるということで、それを一緒になって探って行って、いい形で文部科学省の受託研究にも反映させたい、こういう二つの建付けです。

●磯村元信の元在職高校について

都立秋留台高校（エンカレッジスクール）

昔は大変ないわゆる課題集中校といわれる学校で、年間に140名くらい退学してしまうような、そういう時代がありました。

平成15年に東京都が学び直しの学校を作ろうということで立ち上げて、私は、5年後の平成20年に都立秋留台高校に着任しました。当時も学び直しということで、小学校中学校の基礎学力を身に付けるようなベーシックという、学校設定科目で作った他の学校にはないコンセプトの授業がありました。2人担任制で見ると、結局職員全員がどこかのクラスの担任でした。そういうそれまでの高校とは少し違う高校でスタートしました。

学び直しのコンセプトというのが、なかなか高校の先生たちの中では理解しづらいこともあったりして、この間に病気休職になられたりという先生も増えていきました。退学者も半分に減ったとはいえ60名くらいと高止まりの状況下で、私が就任しました。

生徒が学校を辞めてしまった後もうまく社会に繋がっていけるところを探していると、井村さん（認定NPO法人育て上げネットで若者支援活動）と出会いました。就職が決まらないまま卒業する生徒もいますし、あるいは就職しても辞めてしまってその後困ったときに、育て上げネットでは主に若者支援活動として面倒をみてもらいました。

東京では都立秋留台高校のような学校をエンカレッジスクール*と呼んでいるのですが、これがたぶん全国的に学び直しの学校が広がっていく契機になったのかなと思います。私は、そこで11年間校長をやりました。

都立八王子拓真高校 (チャレンジ高校)

65歳までの残り3年のところで都立八王子拓真高校に移りました。

八王子拓真高校は、朝から、昼から、夜からというような3部制の定時制高校普通科です。その中に、午前、午後のクラスのところに、不登校の生徒のチャレンジクラスと呼んでいるクラスが1つずつ、一学年10クラスあるのですがその中の2つが不登校のクラスということになっていました。その他は普通の定時制高校です。当時、どんどん退学者が増えて100名を超えていて、不登校の生徒が200名を超えるというような状況でした。チャレンジ校というのがあって、それは学校全体が“チャレンジ”、不登校の学校ですけれども、拓真の場合には学年で2クラスだけが“チャレンジ”ということですよ。

私が行って一番違和感を持ったのが、もともと不登校の方を募集して、試験も違います。学力検査をしません。学力検査をしないで入ってくる生徒と一般入試で入ってくる生徒がいるのですが、中に入ると学校のルールは一緒という。これが非常にいろいろなひずみを生んでいました。

●高校入試について (スライド1)

磯村元信：

高校入試の仕組みを簡単に説明すると、学力検査と内申書があります。それぞれウエイトは、だいたい7:3とか6:4といったところですよ。進学校であるとか学校の特性があるとかで、その割合が違っていると考えてください。

中学校から提出される内申書(調査書)は5段階評定と、観点別(知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度)の三つの観点です。ABCの三段階の観点別評価があります。ただし、基本的には5段階評定の方を採用しているところが多いと思います。

その他は面接、作文、実技等がある場合もあります。最近のESAT-Jというのは外部でやるいわゆる英語の試験です。これもいろいろとありますので今後どうなるかはわかりませんが、これも参考にしてください。

不登校 (学び直し) 入試の **リアル**

高校入試

学力検査 (国語、数学、英語、理科、社会)

7 : 3 or 6 : 4

内申書 (調査書) (5段階評定・3観点別評価)

面接 作文 実技

(ESAT-J結果)

I 知識・技能
II 思考・判断・表現
III 主体的に学習に取り組む態度
A・B・Cの3段階評価

●数値化できない入試のブラックボックス (スライド2)

磯村元信：

学び直しを行うエンカレッジスクールの入試の場合には、面接と作文(小論文と)を実施します。そして、一応数値化できるものとして内申書は基本的に観点別です。5段階評定を使わず、観点別の方を使っているところが多いと思います。

入試のことに戻りますが、ブラックボックスと書いたのは、何をもって面接とか作文で優劣をつけるかということが本当に難しいところです。特に、学び直しとか不登校という生徒は、困りごとなどをもっています。例えば極端に言うと面接で固まってしまって喋れない生徒にどう点数を付けていくのか。悩ましいところです。結局主観的なものが大きく働いていく部分があり非常に難しいと感じました。そういった意味でブラックボックスと書きました。

井村良英：

ブラックボックスというとネガティブな印象もありますが、秋留台高校（エンカレッジスクール）が人気校になった理由はいくつかあると思っています。それはやはり努めて、生徒を公平に評価しようと、磯村先生がリーダーシップを取られていらっしゃったからでしょうか。不登校経験など学習経験もばらばらで、一律の基準で良い悪い判断するのではなく、例えば、人前で話すことができない生徒が話そうとしたその意欲を積極的に丁寧に評価されるなど、磯村先生が子どもたちを公平に評価しようということを、すごくこだわって学校運営をされていたと感じています。

磯村元信：

結局、学校の特色やコンセプトをどう理解して来てくれるかということに行きつくしかない部分があります。極端に言えばほとんどこの学校のことを知らないで受験しに来た子と、何としてもここで勉強をしたいという子です。拓真高校は、元々定時制で八王子の中では一番高校就労する割合が多いです。そこで私が大きく看板に出したのは、地元就職です。入学支援の面接や作文もそういった学校の特色やコンセプトを理解して入ってくれる子どもたちを選抜していくということを考えています。

井村良英：

ありがとうございます。エンカレッジの学校もチャレンジの学校も磯村先生がいらっしゃった時に人気になったのは、基礎学習を高校段階になっても学び直しができて、就職にも導いてくれる。今でも秋留台高校は毎年100人くらい就職する学校になっています。だからこそ基礎学力や生活指導を大切にされていらっしゃったということかなと感じています。入試の形式というより、評価を磯村先生が中心に改善されていたからではないでしょうか。

もう一つ思ったことは、両校、最初は中退率が高かったですが、ぐいぐい減っていききましたよね。例えば面接で話すことが苦手な子でも、作文でこの学校に入りたいと下調べをして自分の思いを整理し、伝えた子が入学しているからなど、学びたいことの目的が入学前にある程度たてられているから、中退が減ったのかなと思います。高校にあまり詳しくない方のために少しだけ補足をします。定員が割れている公立学校はほぼ全員入れます。そういう意味では内申書なども関係なく、定員が割れている学校にはほぼ確実に入れるということですね。

公平に評価をしてくださる学校がみなさんから選ばれるというのは、納得できます。次に磯村先生が履修と修得というテーマで、学習や教育歴が様々な生徒が入学して卒業までどうなるのか、学校は何をしているのかをお話したいと思っています。履修と修得について単位認定の基礎的な部分からお話ししてください。

●高校の単位認定のリアル (スライド3)

磯村元信：

何で転退学者減ったのか、実は明確な理由があります。一つは先ほどの目的意識を持った子が入学してくることがベースにはあります。もっと直の部分で言えば、この履修・修得、ここに幅を持たせていくとい

うことなのです。高校というのは頑固なもので、この部分が先生たちにとっては、これまでやってきた履修・習得の基準に対して、幅を持たせろとか単位を与えろというのは、相当な問題になってきます。高校卒業の条件というのは、文科省で決めた必修科目、これを履修していること。あとは74単位以上の修得。これは74単位以上が評価「2」以上が付いているということになります。では履修とは何か説明します。履修主義というのですが、単位認定の前提として一定の授業時間数を出席する、それで履修を認めますよということになっています。何時間出ればいいのかということは、実は決まっていない。なので、各学校が独自に慣例として、履修の時間数を決めています。例に挙げている授業時間数の2/3以上の出席、逆に言うと1/3欠席すると履修にならないということです。あるいは1/4というところも多いと思います。もっと具体的に言うと中学の場合は週の授業時間を実時でちゃんと時数を数えます。一方で高校の場合では法定時数で、実際には35時間ないのですけれども、35時間と仮に決めているのですね。例えば1/3の欠席というのは、12時間で、欠時がオーバーしてしまった場合履修できませんということになります。1/4だと9時間です。すると保健体育など週一時間なので、一番履修が引っ掛かりやすいのですが、この場合一年間で9時間休むともう履修が認められないということです。

二重の扉があって、まず履修ができたうえで、今度は修得になります。基本的には5段階の評定を付けます。ただし、1の場合にはこれは未修得です。修得したことになりません。単位認定というのは、履修と修得。評定「2」以上。これが今の単位認定の条件になっています。

井村良英：

僕は教員になったことはないのですが、成績など付けたことはないのですが、付けられた経験で言うと、この時間数と内容で単位が認定される。でも実は、時間数とかは学校が独自に決めていて、大きな文脈で決まっているわけではない。これは確かにブラックボックスといってもいいのではないのでしょうか。

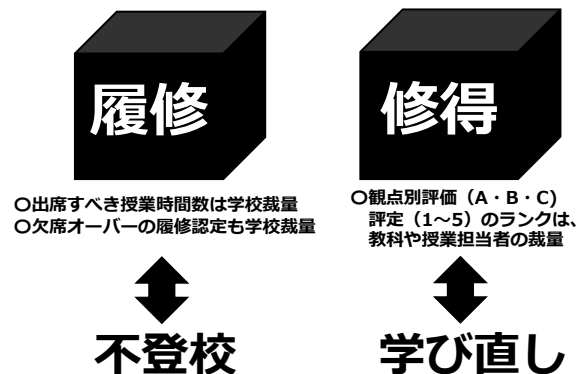
●単位認定のブラックボックス (スライド4)

磯村元信：

履修について、出席すべき授業時間数は学校裁量ということになると、同じ欠席日数でも学校によっては履修になるところとならないところが出てくる。実際に出てきているということです。次に欠時がオーバーしたときに、それを補うための規定があります。長期入院等の特別な事情がある場合には、履修を認めましょうというようなものです。学校ごとにその条件を出して、認められれば欠席時数がオーバーしていても、履修を認めるということです。これがまた学校裁量なのです。

学年制と単位制というのがあって、学年制というのは、各学年で取得すべき単位が決まっており、その単位が取れないと進級できないので原級留置、落第になります。つまり多くの学校で一科目でも履修していないと同じ学年をもう一回やり直しというところが多いと思います。ところが**単位制**の学校は、だいたい6年くらいを上限として74単位取れば卒業です。なので、単位制の場合には学年と言わず年次と言います。例えば、一年次、二年次。一年次にゼロ単位でも二年次にはなりません。学年制の場合には、例えば一科目でも履修ができないと次の学年に上がれないので、何とかそれを補うような、裁量の幅もつくり易いのです。単位制の場合は逆に、来年取ればいい。すると補習をして補うことをしないまま、次の学年に上がります。そこが学年制と単位制の学校で違ってきます。それから以前、高校は評定だけでしたが、現在では観点別でABCを付けることになっています。評定や観点別を付けていく際に、大きなルールは学校で決めます。教科の特性や授業担当者の考え方等によって変わってきます。それが「1」と「2」ですと大きな違いになってしまいます。そういう問題が、どの学校でも毎年あるというあたりがブラックボックスです。

単位認定のブラックボックス



井村良英：

学び直しの学校の方は**学年制**ですよ。不登校の学校の方が定時制の単位制ですよ。定時制の単位制の学校に、私は先生がいらっしゃる前から関わっていました。生徒が卒業式の前の日に僕のところに来て、今日退学するのだと。当時卒業式の前日に退学する意味が全然分からなくて。年次だけ上がっているけど、履修も修得もされていなくて単位認定がされずに、卒業資格を得られなかったということですね。

磯村元信：

単位制は、一年次から普通に取っていればいいのだけれど、学年が上がるほど単位取得が厳しくなっていく。何で単位を取るかというと、選択科目で取っていくのだけれど、ものすごく複雑になっていって、ある時点でもう取れないとなる。そうなるとう退学せざるを得ない状況になってしまいます。

井村良英：

先生は両方の学校で改革されたという感じですよ。履修と修得のところを詳しくお話しいただければと思います。

磯村元信：

拓真高校の場合には、単位を落としていくと、上の年次の選択科目から選んでいく。一応それを想定してある程度のところを取れるようにしてあるけれども、やはり落とした数によってはそこで、卒業単位に達しないことがあります。それをなくすために教育課程を変えようとプロジェクトチームを作りました。若手に考えてもらったのが、戻り履修です。簡単に説明すると一年次の時にやっている教科を落としたが二年次になってしまった。だけど一年次でやっているところに戻る。こうすると余計な選択科目を作らなくても済みます。これが一番大きく変えたやり方でした。

井村良英：

都立ではあまり例がないのだけれども、他県で行われていることを参考に、制度改革を学校内でされていたのですよね。

磯村元信：

チャレンジスクールの担任から、そもそも不登校傾向の子を入学させておいて、全部一律にこれを超えると単位認定できません、というのはおかしいのではないですかと。どう考えても、入り口のテストが違うのに、

入学しからは一般の学校と同じルールでやってくださいというのは、あり得ないのではないかと言われました。私もそれはあり得ないと思いました。でも、ダブルスタンダードでルールを作ってしまうと、やりづらいわけです。それで、全部を下に合わせていけばいいのではないかとことです。また、年度末までできるだけ単位を取れるように補習を組むなどの仕組みを作りました。例えば夏休みなど年間を通して補習に来たものについてはポイント制にして、最後に単位認定の材料にしていったらどうなのかということをしてきました。

井村良英：

下に合わせるという表現は、学校の先生らしいなと思いました。磯村先生はよく、学びのユニバーサルデザインとおっしゃっていて、評価だけではなくて例えば発達障害の影響などで音が気になる子のために、音が鳴らないように椅子にテニスボールを付けたり、壁から離れて姿勢よく座れるようにする工夫だとか、学びやすさを一番学びづらい人に合わせていく。するとみんなが学びやすくなるのではないかとという方針できたのではないかと思います。

磯村元信：

特別支援学校に行ったらユニバーサルデザインの宝庫ですから。それをどんどん学校の中に取り入れていて、授業の中で分かりやすいということは誰にとっても、かりやすいわけだから。高校生はこれくらいできるだろうというのを私は**適格者主義**と呼んでいます。昔の中学生の半分くらいしか高校に行かなかったという時代だったら、当然そういう、こともあったでしょう。今は、98.8%、99%くらいの子どもたちが高校に進学しています。適格者主義に立つと多くがこぼれてしまうわけです。

井村良英：

学び直しのエンカレッジスクールでは磯村先生が校長だった時、第二卒業式というのをしていましたよね。

磯村元信：

秋留台高校に行った時ですが、卒業式が3月頭で、卒業の判定会議が2月にあります。2月の判定会議に間に合わない生徒はその後第2弾、第3弾と判定会議をして、卒業式をするということがありました。何でそこまでやるのかという疑問は、当然ありました。でもそこを、どんどん幅を広げていきました。3月31日までにできればいいじゃないか。3月25日に修了式があって、そこで最後の判定会議をして、卒業式を行うということです。

ある生徒が問題を起こして卒業時期に鑑別所にいた際、一応3月31日で卒業を認めるけれども、きちんとレポート等をやらせてから卒業させようというようなこともありました。もちろん保護者にもその話をして、学校としてはそこまで面倒見ますよと、だから来させてくださいとやってきました。

井村良英：

思い出しましたが、3月に鑑別所に入ってしまったら物理的に出られませんよね。物理的に出られませんがそこに先生たちがレポートを届けに行っていたのを見まして、やはり、人気校になる理由がわかりますよね。そうやって最後卒業するまで関わり続けてくださる学校と高校生の基準を達していないという適格者主義の学校、どちらに行きたいかということですよね。

●ブラックボックスに 光を当てる (スライド5)

磯村元信：

学び直しが何で必要になってしまうのか、何で不登校なのかといったら、100人いれば100通りの理由があ

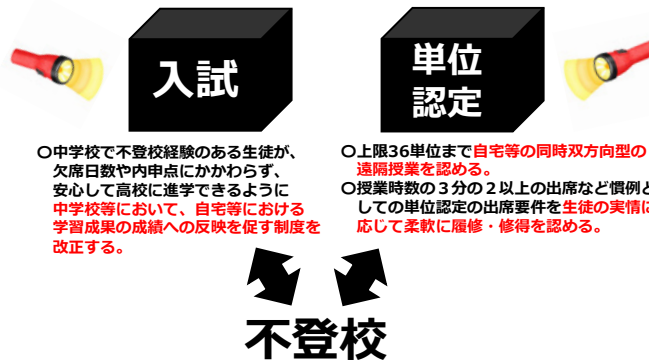
ります。そこを最初に考えていかないとならないのではないかと考えています。

究極はそれぞれの子どもに合うような形で卒業、そして社会につなげていくというところ です。結局今年の8月に中教審 高等学校教育の在り方ワーキングの中間まとめが出ました。キーワードを拾うと「**生徒を主語に**」です。つまり、一律に扱えませんかというのが大前提です。だから目の前にいる生徒から、話を始めてくださいというそういうメッセージだと僕は思います。もう一つ「**多様性の対応**」は今言ったように、色々な学校があるのだから対応しなさい。「**共通性の確保**」一律に何を確保するのかと言ったら、社会につなげることでいいと思うのです。最終的には納税者になっていくところ です。この入試のところも中間まとめでは、中学校での学習における自宅とかそういうものを、できるだけ柔軟に不利にならないように扱いましょうというように明確に出してきている。それから、単位認定のところでは、私が十何年ずっと戦い続けてきた、3分の2とかそういう慣例をもっと柔軟に、生徒の実情に合わせて単位認定をする方向です。学校の外でも双方向性があれば36単位(卒業単位の半分)までを認めていきましょうよということをここで出しました。これは大きな出来事ですが、学校ごとの戦いが始まります。授業をしている先生たちがこれを見て「えっ?」「どうやるの?」とかそういう話が始まります。その学校でどうやっていくのかということ を正式には(2024年)4月からなので、どのような議論になっていくのでしょうか。

ブラックボックスに **光を当てる**

中教審 高等学校教育の在り方ワーキンググループ 中間まとめより 令和5年8月24日

キーワード 「**生徒を主語に**」「**多様性の対応**」「**共通性の確保**」



●中教審 高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第9回)(スライド6)

中間まとめ 令和5年8月24日

磯村元信：

まとめです。不登校の増加と一人一台端末の活用が前提です。もう一つは、特に地方は子どもが減っていくと今の学校が維持できなくなりますから、統廃合することもあります。スライドにある校内教育支援センターは、校内に別室を置いてそこに生徒が登校するというものです。先ほどの問題があって、そこに居ても単位認定になるのかということが、校内的で整備されていない。結局、別室に居たけれども単位が取れない、退学しますということも起こってくるだろうと思います。だから根幹は柔軟に単位認定できるということだし、そもそも評価認定というものは必要なのか等の部分に戻っていくと思います。これから社会につながって生きていくということを考えた時には、何かできるようになったことをモチベーションにつながる力、人とつながる力とか社会とつながる力を身に付けていけば、それでいいのではないのかと思います。

中教審 高等学校教育の在り方ワーキンググループ（第9回）中間まとめ 令和5年8月24日

キーワード

「生徒を主語に」 高校教育は地域・学校により非常に多様な状況にある

「多様性への対応」 生徒一人一人の個性や実情に応じて多様な可能性を伸ばす

「共通性の確保」 全ての生徒が必要な資質・能力を共通して身に付けられるようにする

全日制・定時制・通信制の望ましい在り方

背景 不登校児童生徒数の大幅な増加（令和3年度 小中高で合わせて約30万人 過去最多）
1人1台端末環境の整備と同時双方向型のメディア活用の普及

ねらい 全日制・定時制の現籍校での学びを継続しながら、多様な学びを実現して卒業できる支援の充実

具体策 **履修・修得の柔軟な認定** **通信教育の活用** ICT活用の体制・環境整備

校内教育支援センターの設置 学校間連携等の促進 **入学者選抜の適切な評価**



○ **上限36単位まで自宅等の同時双方向型の遠隔授業を認める**

○ 授業時数の3分の2以上の出席など慣例としての**単位認定の出席要件を生徒の実情に応じて柔軟に履修・修得を認める**

○ 中学校で不登校経験を有する生徒が、**欠席日数や内申点にかかわらず、安心して高校に進学できるように中学校等において自宅等における学習成果の成績への反映を促す制度を改正する**

*エンカレッジ：小・中学校で十分能力を発揮できなかった生徒のやる気を育て、頑張りを励まし、応援する学校として、社会生活を送る上で必要な基礎的・基本的学力を身に付けることを目的として、既設校の中から指定。基礎・基本を徹底するとともに体験学習を重視した学校（東京都教育委員会）

